

伊藤 麦子（いとう・ばくし）

1、プロフィール

俳人。八戸赤十字病院の副院長を務めながら俳句を発表する。俳誌「玫瑰」の発行人。八戸俳句研究会の中心人物の一人。

<生没>

1905(明治 38)年1月3日～1962(昭和 37)年7月3日

<代表作>

句集『老猿』『花蓼』

<青森との関わり>

仙台市出身。昭和 14 年八戸病院の耳鼻科医長として赴任。以来八戸の俳句界で活躍する。

2、作家解説

伊藤麦子は本名儀助。明治 38 年1月3日仙台市東3番町に生まれる。東北帝国大学医学部を卒業後講師を務めていたが、昭和 14 年八戸病院に耳鼻科医長として赴任。以来 20 年間八戸に在住する。当時八戸病院内に二十日会という俳句会があり、佐藤義房、荒井政雄らに加わり俳句を作り始める。その後島守静翠居を知り「みちのく」に句を発表し、昭和 22 年には第1回青森県俳句大会の選者を務める。一方八戸赤十字病院の副院長として病院再建に多忙を極める。翌年「玫瑰」が復刊。麦子は発行人となって主宰島守静翠居と編集人窪田月章を補佐していった。「玫瑰」は 13 号で廃刊となる。

昭和 24 年3月、初の句集『老猿』をあのなつす俳句短歌選書第1輯として発刊。村次郎と孔版印刷石橋正一郎が設立した「あのなつす・そさえて」社8作目になる。

昭和 26 年玫瑰、寒潮、すすき野3社の合同句会が日赤病院で開かれ、名称を「八戸俳句研究会」とした。麦子は音喜多古剣、阿部思水とともにその指導に当

る。ここに八戸の俳壇の一体化がはかられるのである。八戸俳句研究会からは「蕪の花」が発行される。麦子は多くの俳句大会の選者を務め、後輩の指導に専念する。「蕪の花」は 19 号をもって発展的解消をし、新しく「北地」が創刊された。

この翌年 33 年 3 月、八戸赤十字病院を退任し、郷里仙台に帰った麦子は句作をほとんどすることなく、3 年後の 36 年 7 月 3 日に 58 歳で永眠。

昭和 24 年 4 月豊山千蔭らによって遺作集『花蓼』が刊行された。「みちのく」「玫瑰」「蕪の花」など発表した句と、『老猿』の句、総数 398 句。随筆 17 編、年譜がおさめられ、八戸における確かな足跡を残している。

3、資料紹介

○『老猿』

図書

1949(昭和 24)年 4 月

170mm × 130mm

生前唯一の句集。春 23 句、夏 23 句、秋 19 句、冬 35 句。後記として「茂作どのまゐる」の文。あのなつす俳句短歌選書として、「あのなつす・そさえて」社が発刊した。和綴 40 頁。村次郎が「句風、句格瀟洒自在。まさしく新精神」と評した一冊。